

キャリア教育科目における相互評価学習の要素と自己効力の変化の関連の検討

Relation between Components of Peer Assessment Learning and the Change of Self-Efficacy in a Career Education Course

桑原 千幸*,** 喜多 敏博** 合田 美子** 鈴木 克明**

Chiyuki KUWAHARA*,** Toshihiro KITA** Yoshiko GODA** Katsuaki SUZUKI**

京都文教短期大学* 熊本大学大学院教授システム学専攻**

Kyoto Bunkyo Junior College *

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University **

＜あらまし＞ 短期大学の初年次キャリア教育科目において進路選択自己効力を向上させることを目的とした相互評価学習を実施した。実践後の受講生のアンケート調査の自由記述から、進路選択課題に関わる相互評価学習を通じて自己効力がどのように変化したか質的に検討したところ、多くの学習者がキャリア意識の変化や効力感の変化を認識しており、特に進路選択課題の遂行そのものと他者から評価を受ける言語的説得を通じて、進路選択に対する効力感を得ていることが示唆された。

＜キーワード＞ キャリア教育、進路選択自己効力、相互評価学習

1. 目的

筆者らはこれまで、短期大学初年次キャリア教育科目において、他者とのやり取りを通じて進路選択自己効力を高める目的で相互評価学習を実施し、実践前後で進路選択自己効力が有意に向上することを明らかにしてきた（桑原ほか 2014）。しかし、相互評価学習のどの要素が自己効力感の育成に影響しているのかは具体的に明らかではない。そこで本研究では、実践後の受講生のアンケート調査の自由記述から、進路選択に関わる自信がどのように変化したかを分析し、自己効力感を育む4つの源泉（遂行行動の達成、代理体験、言語的説得、情動的喚起）（Bandura 1977）と相互評価学習の要素の関連を検討することによって、学習者がどのように効力感を得ているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1. 対象

私立短期大学において、2015年度前期の初年次選択科目である「キャリア形成論」2クラスの受講者58名を対象とした。

2.2. 授業実践の概要

短期大学初年次にキャリア意識と進路選択自己効力を高めることを目的とし、進路選択課題に

関わる相互評価学習を中心とした授業を設計した。進路選択課題は「私のキャリアプラン」と題して、現在の自分についての自己理解をもとに、卒業から10年後までの理想的なキャリアプランとその実現方法を考え、プレゼンテーションを作成・発表するという内容である。第1～9回は、キャリアプランの作成に必要となる社会状況についての知識習得や自己理解を目的として講義を行った。第10～15回で、キャリアプラン作成、成果物の相互評価（1回目）、成果物の改善、発表と相互評価（2回目）を行った。

相互評価学習システムにはMoodleワークショップモジュールを用い、評価者1人に評価対象者5人を割り当て、匿名で評価を行った。評価基準として、6項目5段階のループリックをあらかじめ学習者に提示した。評価入力画面では各項目を5点満点で評価し、同時に自由記述コメントを1カ所にまとめて入力するように指示した。コメントは、「よくできているところを積極的にほめる」と同時に、改善に役立つ助言もするように促した。

2.3. 調査方法

第15回にGoogleフォームで任意のアンケート調査を行った。調査は成績評価に関連しないことと個人情報の保護について説明し、回答をもって同意とした。有効回答数は53件であった（受講生の91.4%）。本稿に関する質問項目は「キャ

リアプランの相互評価学習を通じて、進路を選択するために必要なことについて、あなたの考えや自信は変化しましたか。変わった人は、どのように変わりましたか」である。MaxQDA11を用いて、コード化とコードの分類、自由記述テキストへのコード付与を行った。分析・検討作業はすべて筆頭著者のみが担当し、複数人による突き合わせ、修正手続きは行われていない。

3. 結果

自由記述テキストをコーディングし、カテゴリ化した結果を表1に示す。効力感の変化に関する記述は38件あり、効力感の4つの源で分類すると、遂行行動の達成が28件、代理体験が2件、言語的説得が6件、情動的喚起が1件、理由不明が1件であった。遂行行動の達成はすべて進路選択課題達成にする記述で、「今まで曖昧だった目標も明確になり、今すべきことが分かったので、自信もついたし、いつかではなくて、今頑張るんだという考えに変わった」「頑張ることを明確にしたことで将来を前向きに考えれるようになった」といった意見が得られた。キャリア意識の変化については18件あり、「自分を見つめなおすきっかけにもなった」といった意見があった。また、変化なしが3件、新たに不安を感じるようになったという旨の1件を不安としてカウントした。

4. 考察

効力感の変化の理由を自己効力感の4つの源の観点から検討したところ、遂行行動の達成に関する記述が最も多かった。進路選択課題としてのキャリアプラン作成によって目標や実現するた

めの方策を明確化することが、進路選択行動への自信を強めていると考えられる。また、言語的説得については、「他の学生から評価を受けることで自分の発表内容に自信を持てるようになり、意識が変わったと感じられた」というように他者から評価を受けることが、自身のキャリアプランの内容や発表に対する自信につながっていると思われる。また、他者を評価することで「ほかの人の意見を聞くことによって、さまざまな考え方ができると感じた」というように刺激を受け、代理体験として影響していると考えられる。

本研究により、キャリアプラン作成という進路選択課題の遂行・達成そのものが効力感の変化に大きく関わっていることが明らかになった。また、相互評価学習で他者の課題を評価することによって学習者自身の視野や価値観が広がり、他者から評価を受けることが自身の進路選択課題への自信を後押しするといったように、相互評価学習が進路選択課題の達成に対する効力感に影響する可能性が示唆された。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金若手研究(B)(課題番号:26750093)の助成を受けている。

参考文献

- BANDURA, A. (1977) Self-Efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change. *Psychological Review*, 84(2): 191-215
 桑原千幸, 喜多敏博, 合田美子, 根本淳子, 鈴木克明 (2014) 初年次キャリア教育科目における相互評価学習の実践と進路選択自己効力の向上. 日本教育工学会論文誌, 38(2): 79-89

表1 コードシステムの結果

コード(変化の種類)	キャリア教育における相互評価学習の要素	記述件数
効力感の変化		
遂行行動の達成	進路選択に関わる課題の達成	27
	キャリアプランの作成	1
	キャリアプランの発表	0
代理体験	他者を適切に評価する能力の向上	2
言語的説得	他者を評価すること	6
情動的喚起	他者から評価を受けること	1
理由不明	進路選択に関わる課題や相互評価学習に対する情動	1
キャリア意識の変化		18
変化なし		3
不安		1